開館スケジュール

開館時間		
9:00 - 21:10	9:00 - 20:00	
9:00 - 16:45	閉 館	

1月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

4月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

1/11(土) 冬休み特別貸出 返却日	1/12(日)・1/13(月) 日曜・祝日開館
1/17(金)-1/19(日) センター試験のため休講 1/17(金) 短縮開館	1/29(水)-3/31(火) 春季休暇期間
1/22(水)-3/30(月) 春休み特別貸出	4/14(火) 春休み特別貸出 返却日
2/28(金) 卒業年次生、単年度生、TAC生の返却期限日 （卒業年次生のみ、卒業式まで延長対応可）	
3/31(火)～4/7(火) オリエンテーション期間	4/8(水) 授業開始

サービス内容・窓口時間		月～金 （授業期間）	土曜・祝日授業日・ 授業休止期間
開館時間		9:00～21:10	9:00～20:00
貸出・返却	1・2・3階 カウンター	9:00～21:00	9:00～19:50
レファレンス受付		9:00～20:00	9:00～19:00
予約制閲覧室の 申込受付	2階カウンター		
ノートPCの 貸出・返却	2階カウンター		
【個別相談】 レポートの書き方 文献探索の方法 データベースの 使い方 など	学習サポート デスク （3階カウンター 昼休み：1階 新聞コーナー横）	授業期間の月～金 11:00～19:00 大学院生の学習サポーターが、学習相談にお応えします。お気軽にお越しください！ ※土曜日はお休みです ※曜日によって窓口時間が異なります 詳細はサポートデスク・図書館HPニュースでお確かめください	

TKU LIBRARY NEWS ～図書館だより～ Vol.9
2020年1月発行
発行元／東京経済大学図書館

TKU LIBRARY NEWS

Vol. 9

学長 presents
図書館まつり ～私と本と珈琲と～特集

CONTENTS

図書館だより

1-2 岡本 英男 学長
<寄稿>「うたげと孤心」、そして図書館まつり
3-4 図書館まつり～私と本と珈琲と～フォトアルバム
5-6 2019年度 感想文・POPコンテスト結果発表
「優秀賞」の紹介
7 開館スケジュール・窓口時間

「うたげと孤心」、そして図書館まつり

学長　岡本　英男

大岡信が書いた本のなかに『うたげと孤心』（1978年）という名著があります。本のテーマは、日本の文芸の歴史のなかで、個人としての作者が他者や人びととの集いのなかで、どのような創作への構えをしてきたかを論じたものです。この「うたげと孤心」という個と集団の緊張関係は、理想的な大学像を考える場合に大きなヒントになりうると私は考えています。

大学は一方では「宴」を必要とします。本学においても、国際シンポジウムから始まる大小さまざまなシンポジウムが開催され、あらゆるテーマの研究会、学生のゼミ報告会、コンパ、ゼミ合宿、サークル活動、春の文化祭や秋の葵祭など、いたるところでにぎやかな交流がなされており、このことが大学を活気づけます。

同時に、学生は一人になって自分を見つめることも重要です。図書館にこもって一人読書をしたり、予習・復習をしたり、レポートを書いたり、試験勉強に勤しむ孤独な時間に耐えなければなりません。教員もまた、研究会やシンポジウム等で教員間の交流を図ると同時に、個別の大学を超えた学問の世界の住人として研究室で、また書斎で自分のテーマを追求しながら黙々と研究する時間を必要とします。

ここで私は図書館を一人でじっくりと読書する場、すなわち「孤心」に還る場の象徴として描いています。しかし、そのような性格をもつ図書館であっても、年に一度くらいは本好きの、読書好きの、そして図書館好きの学生、教職員（元教職員を含む）、卒業生が集まって、コーヒーを飲みながら好きな本や文学、そして大学について自由に話し合うにぎやかな宴の場となってもいいのではと思うようになりました。このような私の思いを徐図書館長に伝えたところ、賛同してくださり、さらにそのアイデアに肉付けまでしてくださり、12月5日に図書館まつりが開催される運びとなりました。

当日開催されるまで私たちが心配したことは、準備の期間が短かったこともあり、本当に学生が集まってくれるだろうかということでした。しかしこのような心配をよそに、当日蓋を開けてみると、約120名もの学生、教職員（元教職員を含む）が集まってくれました。また、単に参加人数が多かっただけでなく、内容も極めて濃いものでした。

16時半から明星大学の向後恵理子先生による「錦絵展示」の解説があり、当日の図書館まつりに花を添えてくださいました。17時からはいよいよ「まつりの本番」で、石丸晶子先生と川井万里子先生によるお話を皮切りに、それに続いて早尾貴紀先生の司会の下で12名の学生による「ブックトーク」、そして最後に鈴木直先生による全体の感想を含むお話がありました。

当日のプログラムの内容や雰囲気、そして感動をよりリアルにお伝えするために、私の手元に届いた4名の参加者のメールを紹介させていただきます。

最初は、当日参加して下さった市民（「社会思想史」の科目聴講生）の方から届いたメールです。

「図書館のイベント、参加させて頂き感謝です。月並みな言い方ですが、名誉教授の先生方の話には心を揺さぶられ、学生達の話にはまさに負うた子に教えられました。その感性と誠実さに、感動しました。そして最後の鈴木直先生のお話でトドメを刺されました、本当に。」

次に職員の方から届いたメールを二つ紹介いたします。

「本日、図書館まつりに参加させていただきました。とにかく、とても良い会でした！予想以上に参加者が多かったです。プログラムも実にお見事な構成で、時間が超過しましたが、引き込まれる内容でした。講演者それぞれが、とてもその先生らしく、心が動かされました。学生たちの発表も、鈴木直先生がおっしゃっておいででしたが、そのままの素直な発表で、本学の学生らしい良さが感じられました。大学で、こういった集まりで教職員が集えるのは、実に素晴らしいと思います。心が充電されました。」

もう一つのメールは、しばらく経ってからの、別の職員の方からのものです。

「ところで先日の図書館まつりですが、石丸先生と川井先生のお話は聞きごたえがありました。とりわけ石丸先生が若かりし頃、片思いに懊悩し、自らの内面にある悩むエネルギーの大きさに驚いたという話は深い話でした。教育力の源泉ともいえる『人間力』に触れたような気がしました。『大学らしい大学』のヒントをもらったようにも感じました。」

最後に、まつりの共同主催者であり、かつ文学者でもある徐図書館長から届いた感想についてもぜひ皆様にお伝えしたく、ここに書かせていただきます。

「会の終了後、学長や鈴木先生とも話したのですが、私たちはみな同様の満足感を抱いております。冒頭の石丸晶子先生のご発言は、私には近代文学の精髄そのもののように聞こえました。それをあのように直線的に、一途に伝えるということは、なかなか真似のできないことだと思っています。学生たちもその一途さに引き込まれて、引き込まれるようにお話を聞いておりました。そこで受けた感化が、それ以後に続く発言のトーンを決定づけたと思います。教育に携わり、もはや定年を目前とする者として、今更ながら多くを学んだ思いです。」

これらのメールはいずれも私にとって非常にうれしいものでした。徐図書館長の言葉にあるように、私自身も「宴」の終了後、心地よい満足感に浸ることができたました。また、石丸、川井両先生の報告からのみならず、学生たちの報告からも実に多くのことを学ぶことができました。

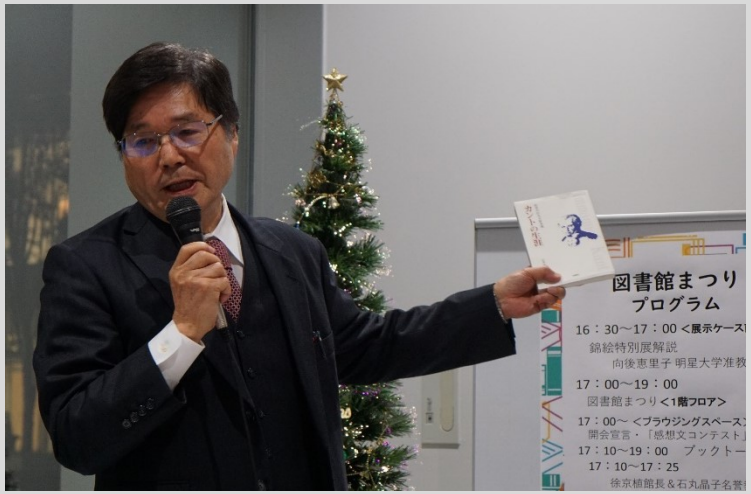
予定終了時間を大幅に超過するなど反省すべき点もありましたが、今後改良を重ね、この図書館まつりが本学の冬の風物詩として次年度以降も続くことを願いながら、私からの報告を終えたいと思います。

学長 presents 図書館まつり ～私と本と珈琲と～ フォトアルバム

「桜井義之文庫 錦絵」解説
向後 恵里子 明星大学准教授

学部生/大学院生参加者に
ハンドドリップ珈琲を無料で提供！
キィニョンのクッキーを特別販売しました

名誉教授によるトークセッション
左：石丸 晶子 名誉教授
右：川合 万里子 名誉教授



「開会宣言」 岡本 英男 学長

「感想文コンテスト表彰式」
右：感想文コンテスト優秀賞 内田 充俊さん
左：岡本 英男 学長

2019年12月5日（木）16時30分から
学長主催「図書館まつり～私と本と珈琲と～」を開催しました。

このイベントは、学長の『学生に本の魅力を伝え、本への興味関心を喚起し、本を読みたいという気持ちにさせるイベントを開催したい。』との強いお気持ちから実現の運びとなりました。

「ブックトーク」や「感想文コンテスト表彰式」、さらに特別展示の貴重書「桜井義之文庫 錦絵」（現在は期間終了）の解説などが、図書館1階フロア全体を会場として行われました。

学部生/大学院生の参加者にはハンドドリップ珈琲が無料で提供され、会場全体が"珈琲"の香りに包まる中、本を通じて、学生・教職員問わず、参加者が繋がる場となりました。

「ブックトーク」 司会進行 早尾 貴紀 准教授

「桜井義之文庫 錦絵」ギャラリートーク
右：徐 京植 図書館長
左：向後 恵理子 明星大学准教授

2019年度 感想文・POPコンテスト結果発表 /「優秀賞」の紹介

＜感想文部門＞「優秀賞」 内田 充俊さん（経営学部1年）

お題本：FACTFULNESS－10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣

「現在、低所得国に暮らす女子の2割しか初等教育を修了しない」、「世界の人口のうち、極度の貧困状態にある人の割合は、過去20年間で約2倍になった」

そんな言説をどこかで聞いたことがないだろうか？そして違和感なく受け入れているかもしれない。

ではここで、実は上の二つは全く嘘で「現在、低所得層に暮らす女子の60%以上が初等教育まで受けている」し、「世界の人口のうち極度の貧困の人の割合は過去20年で半分にまで減った」のです。という真実を提示されたら驚くのではないだろうか。なぜならこれまで私たちがなんとなく抱いていた印象と、現実のデータが乖離しすぎているように感じるから。

今回紹介するのは、そんな今まで私たちがなんとなく抱いてきた現実への悲観的なイメージに「否」と明るい真実を突きつける本だ。

ハリス・ロスリングの『ファクトフルネス』（日経BP社）だ。

この本で著者は「私たちは現実を正しく見ることができていない。必要以上に悲観的に妄想してしまう病にかかっているのだ」と喝破する。そして返す刀で「教育を受けている人でもこの偏見の病から逃れているわけではない。むしろ三択のクイズを実施したところ私たちの正答率はチンパンジーに無作為にボタンを押させたものより酷いものだった」と切りつけてくる。

それではなぜ、私たちは現実を悲観的なものと勘違いしてしまうのか。

本書の中で筆者は「私たちには傲慢な偏見が存在する」と語る。それは、「ヨーロッパ化された私たち先進国」と「アフリカなどの後進国」と単純な対比で世の中を見ようとする偏見だ。現代の私たちはまるでレンズの歪んだメガネをかけているように、20年以上前のボケているピントで現実を見ているのだ。

ただそうは言っても私たちが自分のことを責め続ける必要はない。この偏見は私たち個人の価値観のせいと言うよりはむしろ、いくつかの本能が関係しているからだ。

例えばその本能のうちの一つは、「世界はどんどん悪くなっていく」というものだ。もともと人間は楽観的すぎるより、悲観的な個体の方が子孫を残してきた。ネガティブに考えるがゆえに将来への対策を怠らず長生きしてきたからだ。そんな遺伝子をついできた私たちもプラスの可能性よりもマイナスの可能性を考えがちとなっている。だから冒頭のようなありがちな悲観的な予測が語られると、私たちは本能的にその恐怖を想像して納得してしまうのだ。

ところで、少し話題が変わるがここで本書が世界的にベストセラーになったという事実とその理由について考察したい。

本書、『ファクトフルネス』は世界40カ国で発売され100万部のベストセラーを記録、ビル・ゲイツが絶賛のあまり2018年にアメリカの大学を卒業した学生の希望者全員にプレゼントするなど社会現象となるほどの売れ行きを見せた。これはまごうことなき大成功である。

もちろんその売れ行きにケチをつけるつもりはないが、こんな疑問を抱いた人もいるのではないだろうか？それは「おや、待てよ。この本のコンセプトに似た本はどこかで見たような気もするぞ？」という少し意地悪な疑問だ。

というのは、このような「データや統計を基にして私たちの認識の過ちを指摘する」類の本はある程度の熱心な本読みならジュンク堂など大型書店のビジネス書の棚に行けば毎月のように出版されていることを知っているかもしれない。まるで小説という中のSFというジャンルのように、ビジネス書の中では統計を使った本は一つのジャンルと言っていいほど浸透している。つまり、実はこの本の最大のオリジナリティーは単純に統計やデータを使っていることとは言えないのである。ではなぜこの本がここまで売れたのか？

その理由はズバリこの本のビジュアルを多用した見せ方にあると私は考える。

例えばもしこの本が数字とデータの羅列だったら、私は読み通すことができずに机に突っ伏して本書を枕がわりに爆睡していただろう。なぜなら私は数字が出てくると5分と経たずに眠くなってしまう生粋の文系人間だからだ。

しかし私はまずこの本を1ページめくったところのカラフルな『世界保健チャート』に身を乗り出し、イントロダクションのクイズでは「あなたの世界への理解度はチンパンジーに無作為に三択を選ばせたより酷い」との筆者の舌鋒にクスクスと笑いながら気がついたら最後まで一気に読み終えていた。

つまりこの本の売り方の最大の魅力は、私たちが退屈しがちな無機質なデータを、カラフルなグラフや冗談を交えた読みやすい語り口によって明快に提示してくれた点にあるのだ。

この本の作者はどうしたら飽きっぽい凡人である私たちが（そして凡人であるがゆえに最も世界への偏見に満ちている、本書の対象読者にふさわしい私たちが）飽きずに最後まで読み通せるように、という情報の提示の仕方への工夫が卓逸している。

そしてこれこそ私がわざわざ2000字もの文章を尽くしてでも「この本について紹介したい」と熱望した最大の理由なのだ。

Factfulness－10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣
ハンス・ロスリング他 著
上杉周作，関美和 訳
日経BP社 2019年

＜感想文部門＞「佳作」陳子怡さん（大学院経営学研究科1年）

お題本：「男も女もみんなフェミニストでなきゃ」

男も女もみんなフェミニストでなきゃ
チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ著
くぼたのぞみ訳
河出書房新社 2017年

＜感想文部門＞「学長賞」該当なし

＜ＰＯＰ部門＞「優秀賞」、「佳作」、「学長賞」該当なし